

特 67
722

明治十四年十一月

東京繪入新聞拔萃

藤之話

第壹號

朝日新聞拔萃

貞操義膽

お藤の話

現今横山町二丁目原籍乃ある北川何某(今年)乃父傳吉ハ淺草
 代地に住居して女房お理與との中何某と二人の女乃子があつ
 て何某ハ今を距八九年前横山町乃監中屋へ年季奉公みやり跡は
 親娘四人生計で傳吉は仕立屋城渡世最有福にる日を送つて以
 たぐ惣領娘お藤(今年)廿五をいふは縹致もよ々且つ伶俐の性なれば
 一層心惹つけ弟の何某ハ他家へ養子にやりお藤も然るへき養子
 を貰つて家城譲らふとのことと兩親は内々相談を定めてゐたと
 ころフト父傳吉が煩ひ出し苟且の病氣と思ひ乃外段々重くなつ
 て醫藥乃驗もなく去る明治五年中み遂に亡き人となつた後ハ家

業の仕立屋も出来兼て餘儀なく是迄の住居成賣拂ひ夫等を資本
 に同町の表通りへ移轉り後家のお理與が兩人乃娘を相手に炭薪
 乃店成開き相應な構でやつて以るうち翌六年は娘お藤もハヤ十
 七といふ娘盛になり近所の人乃目に付をまで生長したを舊佐々
 良藩士にて同町で醫業を志している花岡幸庵は幸ひのことゝ喜こ
 んで頭てさる人娘頼み母のお理與に仔細説明した末是非とも妻
 に貰ひたしといひ込みし始めて知た母親は家名成取らせざる氣
 の娘夕この不仕末ハ何事と驚き嘆いてお藤を散々折檻しぬれど
 今更其甲斐なく殊み段々月が重なり人目みかゝる姿とあつぬに
 泣々親類を相談のうへ改めて幸庵方へ嫁にやりしハ同年の冬の



喜ひ
 當分
 人の羨む
 まて互
 に申よ

○専みて兩人ハ望
 みの遂げた

庵を女狂ひ娘始め

日と
 經るま
 幸

ぬのでお藤ハ倍氣を起し是より夫婦乃中に大騒動出來て度々其筋の御厄介になり明治八年乃三月東京裁判所の判決までお藤ハ實家へ引渡された等のとえ其頃の紙上も記して大評判のことなれを爰に畧しぬ借もその後母のお埋與ハ漸乃ことにて娘をば引取ハしたも乃手許へ置いてハ安心ならずと忤何某が奉公先乃横山町乃監屋が女房を島をいふ者ハ實乃妹てお藤もハ伯母に當る内縁もあれば同家へ別段も頼んで暫を預けるとお藤を今まで男乃ぬめも苦勞越したることと忘れ店にゐる職人乃伊兵衛「乃乃二十」と誂しな中よなり人目忍ひ樂む越知らぬ主人ハ母親越勸めて渠ハと日頃がら心よ叶ひし同し職人清三郎「廿」といふも

乃越お藤乃聳にする氣よてある日事乃越き越夫と具に以ひ聞せると伊兵衛と既よ約束越志あるお藤ハ心中よ是ハお痛く當感志ぬれど恩ある伯父乃語と以ひ一人乃母も長の年心配させぬおなれハ否みおたさに承知乃よ志越答へて乃場越繕ひ置えが心に染まぬ縁談何ゆへいよ今宵ハ我家へ戻り清三郎お祝言越しやふぬいふ朝よ臨み伊兵衛越連出志落人を出掛けぬこおが跡よて知れ母を元より監屋の主人乃立腹大方ならず女の身おとて憎み所業草越分ても搜し出し思ひ知らせてくれんと所々方々探索に十分手越ハ尽したれど更に行方ハ知れざりしお却て説くお藤伊兵衛ハ首尾よく家出ハ志ぬもの、押らるゝお恐る志

さよ新橋より汽車よ飛乗り神奈川から夜通し翌日相洲小田原
 の或旅館へ着たゆへお藤はやつや安心して伊兵衛を壹人残し置
 き自分、其まゝ同驛乃田邊といふ親類へ頼て行て東京の仕末茂
 都合のいゝ様よ涙なららぬ嘸した乃て田邊ハ一切賈事に受け伯
 父と姪との中とはいへ縁談ふとを壓制にされては狭ひ女氣に逃
 け出す心よなつぬ乃もまんどら無理ともいへぬ譯併し若い身ろ
 らよてよくマア一人て無事に來たところの苦志を察しなと、其
 まゝ留て置てくれるよお藤を旨く仕負せたと喜こんぬれと伊兵
 衛乃事か心よゝれハ内々での旅宿屋へ尋ねて行き伊兵衛よ
 何やら囁やくと渠ハ早くを點頭て支度をそこく只一人東京さ

して立歸つたハ何ら仔細のあることあらん夫ハ借置田邊の主人
 ハお藤の今乃身の上を感然と思ふ心からわざと東京へ出向て
 行き母のお理與よ面會して段々様子探つて見ると智養子乃一
 件ハ全く夫よ違ひあけれと渠が家出越えた日より見世の男を
 あくなり未だに歸つて來あいのと思へハどうやら娘が淫奔事
 としぬうへでの逃亡だるふお理與まで疑ふ景色に此方でも若
 しやや一時ハ考へたが兎に角頼つて來た時からお藤一人に林達
 なければ歸國して今一應嚴志を尋問して見やうと田邊ハ心に思
 案決定め何え兎をあれお藤をのえ當分私が預るほかに必ら此
 心配しなざるな鼈甲屋へは内分にてお理與を慰め立戻て早速男

の譯柄わけがら裁証たせし此こが志こころて尋ねたれと藤ハ一向こうじ知らぬをのみいも
 張るは体の虚うつろを見へぬ又田邊たにべを聊いさか安堵あんどして半月はんげつぬら此客きやく分に
 志こころて置おを折柄おりがら兼かねて普請ふしんも掛かつた温泉おんせん場ばが乃すなはち頃漸ころやう々く落成てきあがりつて店
 開ひらき乃すなはち當日とうじつぬなるを茶番ちやばんとさぢる女おんながなさに何いづれを困こまつてある
 と見て藤ふじは爰こゝを主人しゆじんに嘸はかしわざと人目ひとめに立たつ様によを派手はても着
 飾かざり入湯にうとうぬる容扱きやくあつひも出掛でかけるを田舎いなかに稀まれな別品べつひんなれば忽地たちまちパツ
 の評判ひやうばん志こころて在ざいかたよア兄せうア達たちが藤ふじを當込あてこみやつて來くる乃すなはち一日
 増ましふ繁昌はんちやう志こころ頼たのみ志こころないビヲりつぱなと城立りつぱ派はもこしらへよこ此者ものが
 我劣われせうら此こを多おほくあるに主人しゆじんハ深ふかく喜よろこんで昨日きのうに替かり藤ふじくぬ
 又またなきその思おもつている後のち乃すなはち志こころハ例れい乃すなはち次回おくりかいよ

貞操義膽續乃錦

深翠ふかみどり千歳ちよせを経ぬる松枝まつがへを嚴霜しんじゆ積雪せきせつの苦くも遭あふあらざれば其後そののち
 洞ほら乃すなはち操みさを見るに由よしなし干將かんしやう莫耶ばくやと呼よぶと名劍めいけんも盤根ばんこん錯節さくせつの難がた
 と試こころむるにあらざれば其稀世そのきせいの力を得とれば然されば人も亦また多少たしやう乃すなはち辛しん
 勞あつげ閑ひまし非常ひやうぶ酸苦さんくを嘗あじめて乃すなはち名なを新聞しんぶんも傳つふへを譽ほまれ城せき江湖きやうこも
 輝あやみすへく或あるひハ講談家こうだんかの口くちに上のぼりて衆あひ乃すなはち喝采かつさい買かひ或あるひハ演劇えんげきに
 仕組しぐみれて人ひとも感動かんどう城あへあど往所ゆくところを志こころて美談みだんならざるハあく又
 榮譽れいよならざるハなし人生じんせい乃すなはち愉快復焉たのしみまたこれに過こるも乃すなはちあらんや茲こゝも説
 出いは遠とほく二十餘年ふたじゆねんの往昔むかしも遡さかのぼりて其緣由そのゆかりを證あきし近ちかく本年こゝしの今
 日けふに至いたる正ただに大團圓おほぼんぎん裁結わいけつへる忠魂義膽ちゆうこんぎだんの清操せいさうに貞心ていしん烈志れつし婦節ふせつ

交へし美事乃物語其行文乃面白らる此して看官の欠伸促が如
 きえ記者の筆鋒鈍さぐ爲めなり敢て恐縮せざらんや記擧の數十
 回も跨り或ハ其冗長の嘲り或來比如きハ固に記者乃罪にあら此
 看官其之嫌嫩乃錦も問へ頃ハ萬延元申乃々し幕府乃威勢未だ地
 に墜す三葵徽号猶天下に輝くの際にあり時の征夷將軍徳川家
 茂公か或日〔八月十五日〕譜代外様の諸侯伯城集め御能御殿に於
 て御能の大會城催されけるをりから尾張中納言茂徳卿の御側御
 用人鈴木半之丞の一子同苗操〔此時十九〕をいへる美少年を同志
 く御能列も加えり箴乃生或る勤め志か此少年天成せる麗質玉を
 欺くばかり色晰く眉濃く何れなく自然も調子高く人品秀で優に

柔しき容姿ハ光源氏夕昔の様の業平朝臣を生寫も殆しかぬを思
 はるゝほどよ見れたれを數多き能組乃中に一際比ぐれて目覺志
 を衆乃目を驚かぢ志まゝ家茂公は志め諸侯伯及び御簾の中なる
 御息所や隨行乃侍女達までが偏へに眼を舞臺も集めて餘念あを
 一舉手一動作よさへ深く注意と満場肅然と志て各口の内も嘆稱
 乃聲或籠つゝ誰一人感ぢぬをのゝあらざり志が中にを菊の間御
 小姓御番頭戸川近江守の家臣酒井作次郎乃娘もて其頃御殿女中
 に上りし雪江〔此時十七〕といふが是を同志く性質ハ慧ふ志て黙
 からず無垢もして鈍ら此う乃うへ顔だちよア品振りまで欠満を
 なき尤物島田乃わげの髪くせよ心をうつる戀知り年情もあまり

て欠るかや十六夜頃乃月乃黛見人聞も乃誰かふく濃も薄くも
 惚氣さす絶世の美人にてありける此日端なを鈴木操か能舞の
 手振さへ足踏さへ殊に勝れて人の目褻ま立ちはあまの優なき姿
 娥見染めえよア漫よ由なき心娥動るを蝶羽風過て菜花香遂を蘇
 小を己よ阮郎娥憐れむの情意あり眼波眉語乃中鸞盟訂し來りて
 鸳約結ひ去り佳人才子ば他日は良縁を結ふ乃端緒を惹出物しと
 ハ後に思ひ知られるされを元より深宮の内宮仕給る窮屈の身
 の上なれハ高間の山の峯の白雲を餘所なつら見るに等しく一を
 して思ふ事の隨意あらぬゆゑ其後は只朝夕も獨り胸のみ焦しつ
 思ひ絶へなんやはかり娥人傳ならで手畜乃猫乃首玉に文縫込

みて打通は珍蝶の羽に歌替て君が袂にとまれが志を放つなんど
 古人の説けん言の葉さへ今さら思ひ出されて干々も心娥碎ける
 雪江乃氣こそ愛しけれ
 水乃面みてる月なみを敷娥れを今よひろ秋乃最中なる三五乃良
 夜よ方りければ御能の番組を順娥追て首尾よ々千秋樂娥言げし
 乃ち更も觀月の御宴娥別殿に開る珍給ひぬるも恰も空わ晴渡り
 一碧涯なく拭ふが如く水晶殿に開て蝶娥陰も窺ひ玉宇風過て桂
 花香を吹を現も秦山乃一千餘里凜々をして永敷き漢家乃三十六
 官證々と志て粉飾隈をなきみうらに秋の月澄めは庭には冬乃水
 ぞろ敷くを古人乃詠まれけん景色を今霄に在りと思出さるゝ乃

みか葉末に結ふ白露に月はやとりて玉を見へ千草も脚く鈴虫の
 音さへ涼さく哀れも聞江一入の餘興残添へにける此時將軍家茂
 公は志め諸侯伯御小性近侍乃士に至るまで廣間の中も會合し坐
 なびら廣漢宮も上りし心地もつあのく詩殘賦し歌を献して
 愛度美世も陰りあくさやけき月乃光殘拜しつゝ華陽觀裡秋檀乃
 上今夜清光此所も多しその唐詩殘奉ぐるあれを夜を共よをもら
 ぬ雲の上なれば思ふ事なく月を見らるゝふとの古歌殘上つるもあ
 りていと盛大の酒宴なり志ぐ家茂公乃特命もよりてかの鈴木操
 とも其席に召さる玉ひけれハ操ハ已に晝間料らさる乃喝采を博
 し光慶限なきうへに又も今宵の恩命も遭ひ榮華乃ほをそ身にあ

まりろゞるに感涙の溢るはがマ恐るく小性乃人に誘はれて御
 坐敷近く進し志に公は深を操乃容貌なり藝能あり乃人も優れし
 のこぬ残愛さ珍給ひお側へ引つけて茶菓子残賜はりいろくの
 こぬゞも残御下問ありけるも操は聊か臆る色なを言語應對式
 作法いすれも何所も抜目あを恭しく夫々の御答を申上げし
 より益々其才氣の尋常ならざるに驚かれ猶操乃身分素性などを
 委悉く尋ねさせ給て仰珍らるゝやう汝歸りて汝が父乃鈴木半
 之丞やらに其よ志を陳へよ明日よマ汝殘吾小性に出仕あさ志
 むへしとの有少ぬき厚恩を肺肝も銘志頭て御暇を載きて引取し
 が是う操が立身出世の階梯あり早速出仕残はへきならんを看

官は早々想像を下さるゝ一とされぬ操は翌日より病氣と稱し日
 経ても更に出勤せざりしゆへ公も頗る望を失ひ給ひ成丈念
 入れ療養を加へ早々快癒して罷出よとの滲からぬ御意さへあり
 といへとも操の心中に思ふところあれば遂に其年の暮るるま
 て猶其出仕を辭さるるは深き子細のありきこゝにて次に至り自
 ら此由分明なるへし且這は後乃語も係れと筆の序に任せて俱に
 記さるるなり

却説其夜操は御殿を退りて上市谷御門外尾州公の御屋敷内なる
 吾居宅まで甘町あまり乃路を心いろく歸り來しに父半之丞は
 操の歸り乃遅き故按しつゝ有らぬこゝをまて氣を廻さる處にてあ

りければ急ぎ迎へて
 御殿之様子御能のこ
 と其外何ヤ角ヤ一時
 も尋ねけると操の夫
 々答へ了り其のち容
 を改めて今夜存し
 寄らぬ將軍様に謁見
 を遂げ賞美乃品給し
 か上明日より御小性
 に出身さるんぬの厚



き思召おぼしめし儀蒙りし旨たまは一々具さし物語ものがたは半之はんの悉も喜悅きげつ極りて感涙かんで
 に咽なげひ須臾しゆじゆの程ほどを言葉ことばなく操あそぶ顔かほと打守うちまもりまが良よあつて言いける
 やう汝なんぢが今日こんにち乃なほ榮華えいげよつけても漫まに思出おもひだす昔むかしも乃なほ素性そせう未だ實事まこと
 言いけさるゆへ知しらぬも誠まこととに道理道理なら我われは汝なんぢの賈たつの父ちちよあ
 らは汝なんぢが父ちちハ今いま戎距えいこる十八年じゅうはちねん乃なほ以前いぜん人に討うたれ敢あなを非業ひげう乃なほ最期さいご
 を遂とたり其時そのとき汝なんぢは母ははよ抱いだかれま多おほ嬰兒えいごなりしの抑おさも其汝なんぢ乃なほ父ちちを
 いふは筑後ちくご久留米くろみの城主ちゆうしゆ有馬ありま中務なかつむ大輔おほさふ慶頼けいり公こう乃なほ家臣かしんよ家祿かろく三百
 五十石ごじゆしやくを戴いたきと鈴木すずき幸之進さちしん吉弘きちひろと呼よべれと砲術ぱうじゆつ師範しはんの重役じゆうやくあま
 其妻そのつま小梅こむめは即すなはち我われの妹いもにて夫婦ふうふ情交じやうよく家事かじ治をさす主君しゆくんよ飽あまで
 忠義ちゆうぎ竭つつ上かみ三田さんでん通右角つうごかくの屋敷やしきよ砲術ぱうじゆつの指南しゆばんとな此こうち

偶たま生れしハ汝なんぢにて兩親りやうしんの喜よろこびんよ物ものなく現げんに衣ころも乃なほ裏うらの玉手たまての
 内うち乃なほ珊瑚さんごを撫なさすり愛あてらだつる間まをなく父ちちの幸さち之進しんは火急かきう乃
 御用ごようありて本國ほんこく筑後ちくごへ出立しゆつたつを命めいづられ彼かの地ちよ着つき暫時せんじの間返あいたさう
 留りうなかるをりもあれ功こう堀ほり嫉ねたむ乃なほ小人しやうじんが意い識し咄ぶつ合あむ乃なほ惡漢あくかんの何物なにもの
 をも知しれぬ暗夜あんやよ紛まれ幸さち之進しんが深更しんご獨ひとりり御殿ごてんより下さり下さりけ城外おやうがい
 乃なほ小陰こかげよ身みを潜ひそめ不意ふいよ後うしろよ斫きつけたる太刀たち風鏡ふうきやう急所きゅうしよにさ
 わり何なにしのは以もつて當あるへき無慘むさんや其場そのばよ倒たれしまゝ終ついよ歸かへらぬ
 彼世かのよの旅立たびだち早く此舉このこゝろ江戸にへ聞きへ母ははの悲嘆あはきは言いも更さらあり屋敷やしき中
 の人々ひとびと駭立さいだちち上うへと下したへ乃なほ混雜こんざつおれを何なにいふても海山うみやまへだてし本
 國こくを江戸にと乃なほ遠隔えんかくゆへ思おもふ事ことの一ひとつとして心こゝろよ任まかす兎うろ角かくせ

んをふぬめきけるうち深き悲嘆乃身み微しけん母は端なを病病
 乃床に就くまゝ食さへ進ままた次第々々に蒸重を日増しに一身乃
 憔悴を加へ既に九死一生乃危急に見ゆし矢先へ遽は御差紙の着
 たるありて幸之進軍一藩乃砲術師範家なる重き身み持もたから平
 生乃心得方宜かからざるより城下乃人家を騒かましたる罪科つよ
 り家祿没取むたるとよし達たたられ憂うれか上うに憂うれを重おもねいよく追
 る母の病体早其息の根ね引取んとするとき一日我を招きて這度
 夫が災難を嘆き自分の死まとあつと汝の生長せまうへにて必ず父
 の冤罪を雪き汚名を洗ふの機会きをころはいふへけれ此處乃道理
 を能よく合あつて明日より御殿へ出仕乃上は一際忠勤ち誠まて、努

々粗忽ろのなきやうと慈悲あも情愛あもありかたき叔父の言葉こも雨眼
 の涙を拭ぬひて操乃胸裏む遂つに何等な乃事ことをや案出あす其は次に於て解
 説せん
 操みわり両手りをこまぬきつゝ心こ獨思ひふよう今いままで父母お實ま乃
 父母おとおもいしし何なんるは圖はらん實まの父母おは遠とく筑後乃本國ほんに在あつ
 順道じゆん乃死しを遂つられたるにして猶な終天しゆう乃恨うらならざるに況まして
 或あるは惡徒あくの手てに罹ありあるは二堅ふたの崇たるをころなり俱ともも敢あさき非業ひ
 乃御最期ご知らぬうちならまたまたまのこを不幸ふ乃罪つも輕かからんな
 れど既に委細い聞きたるうへ此儘安閑無事を偷ぬみ一身乃榮華えい乃み
 貪あほるときには吾死われて乃ちなき兩親お地下ちに遇あひ復また何の面目めん

あつて其辨解をなすへきや不幸乃上乃不幸重ぬ天神地祇も其罪
を惡み玉ひ廣き此世に存へても五尺の身さへ容る處あきに至る
ハ必然の道理なれハ今より一際心裁勵まざる骨を碎くやも身を粉
にむるとも親の仇乃在處を捜ふ爲めに無實の汚名を雪ぐでやあ
くへきそ苟々も此大專を成遂けるまでは假令千百萬兩乃金眼乃
前に積百千萬石の祿を以て誘ふるも決志して靡らぬ鉄石の心
を堅めて勞苦を辭せ此早晚今日の目的を達せんものを思切たる
奮發の氣象顔色も現たれて尋常あらず見けるまゝ半之丞を早く
夫れと察し小膝を進めて操に向む最前吾言を聞しより汝が何乃
返答もなく物憂をしき面色よて思案に暮れし意中の奥底大体我

は推量せり思ふに汝が存慮をいふは云々爾々の次第もあらむや
果して是も村違なく我れも甚ぬ左胆して飽をまゝ汝乃意を賛
け力乃及はん限り助勢をへし然れば亡妹即汝乃寶母に委託せら
れ臨終の際の遺言背かずして嬰兒の頃より今日の日まで汝を
養育功もあま吾一分の立つは固より汝が亡父母も尽すところ吾
養育乃義も報ゆるところ悉宜きも適さぬあゝ即ち一舉兩全の得
策ならぬ星を指されて操は吃驚如何にも御推量の通りよて已
ふ一死を神の誓ひ必ず不但載天仇復たる乃決心あまを包まむ
自己乃煮衷を吐露し猶叔父半之丞の意見を尋ねしに元其仇は何
人よて今何の地在るをいふあまをさへ定かならぬを内實は其人だ

け零判然とて只其在處乃明かならざるのみ 以下次號

廣告

這回弊舎ニ於テ諸新聞人情ニ關スル要項之雜報ヲ拔萃シ茲ニ一ノ書トナシ以テ諸彦之御愛顧ニ預リ御購求ノラシメテ奉祈候以上

明治十四年十一月御届
同年十一月廿五日出版

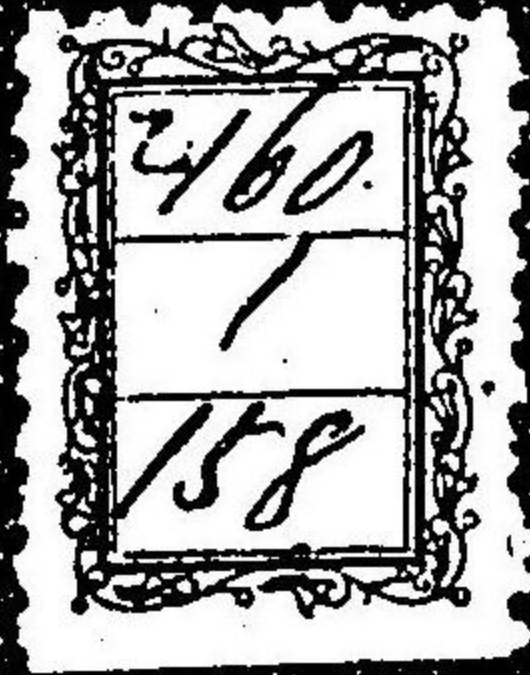
本紙定價 壹部金五錢 當市街外ハ別ニ郵稅ヲ受ク

愛媛縣北宇和郡本町三十八番地

綴刻人

川 越 直

賣捌處 宇和島堀端通 船田小太郎 八幡濱 兵頭伊太郎



205088-000-0

特67-728

お藤の話 (東京絵入新聞抜萃) ・

貞操義膽 (朝日新聞抜萃) 第1号

川越直

M14

EDV-0091

